

# 鳥取県

## 街道 1

鳥取県の最初の特徴的な遺産は県都である鳥取城下の碁盤目状街路（鳥取市、江戸初期）**A**である。日本中の多くの城下町で、戦国末期から江戸初期にかけて何らかの町割が行われている。規模という点では鳥取城下は小規模な部類に入る。それにもかかわらず言及するのは、発想の面白さである。大手から平行に延びる3本の街道（若桜街道、智頭街道、鹿野街道）を中核とした街区だが、智頭街道の正面に、あたかもバロックの都市計画におけるアイ・ストップのように久松山（山頂に本丸）が聳える様は、町を非常に魅力的なものにしている。このプランの作成者は、後に岡山藩の初代藩主となる池田光政であった。道路と交互に設けられた生活排水溝群も、優れたアイデアである。



## 街道 2

鳥取県のもう一つの街道遺産は、山陰随一の霊峰・大山に関わる遺構群である。大山信仰といえば、神奈川の大山が有名だが、こちらは雨乞いの神を祀る阿夫利神社本社、一方の伯耆大山は山そのものが御神体である。大山の石畳は、川床道の石畳（大山町、慶長年間（1596-1615）**B**、大山寺参道の石畳（大山町、寛政8（1796）**A**〔写真〕が有名である。前者は、天保～安政年間（1830-60）という説もある。後者は、入口に立派な大山寺参道修繕碑（大山町、寛政8（1796）**B**）が建っており、完成年が確定している。参道石畳は、路肩を縁石で固定し細長い石材を意図的に混入させた構造で、他に例を見ない。石

畳というよりは舗石に近く、道を横断する細い水路溝も縁石で丁寧に仕切られている。



## 舟運 1

鳥取には、日本海側で最も旧状を留める菊港の防波堤（琴浦町、江戸後期）**A**がある。規模はさほど大きくないが、人頭大の玉石を傾斜堤のように緩勾配で積み上げているのが特徴で、蒲鉾型断面が主流の江戸期の防波堤とは一線を画している。恐らく波の荒い日本海に適合させようとして生まれた形態ではないか。



## 農業 1

灌漑農業という観点では、弓ヶ浜半島を灌漑するための用水・米川（米子市、元禄14（1701）**A**）が特徴的である。弓ヶ浜半島そのものが、全長15キロにも達する巨大な砂洲であり、江戸初期から人が入り畑作を始めるようになった。しかし、天水に頼る砂地のため作物は限定され旱魃にも苦しめられた。奉行・米村所平広次はこの半島に水を引くことを提言、鳥取藩第二代藩主・池田綱清により元禄13（1700）に着工、翌14年に両三柳までの第一期4キロが完



成した。その後、宝暦9(1759)に全線開通するまでに3度伸延し、農業用水が末端まで行き渡るようになった。水路そのものはコンクリート改修されてしまったが、水面そのものは残り、今でも、特産の白ネギをはじめとする農業に貢献している。



## 農業 2

街道の項で述べた伯耆大山の大山寺は、牛馬の守護神としても崇拝されるようになり、祭礼の場に商人と牛馬が集って享保5(1720)に伯耆大山市として開市したとされる。この大山寺博労座(大山町) Bでは、牛を連れて大山に参詣した者同士で牛の交換が行われたが、江戸時代にどの程度の頻度で市が開催されていたかは不明である(最盛期の明治36頃には年5回市が開催され、売買された頭数は1万頭にのぼった)。跡地は参詣者用の駐車場となり面影は全くない。

## 漁業 1

湖山池の石がま(鳥取市、承応4(1655)以前) Aは、全国でもここだけでしか見られない特殊な漁獲システムである。完全に現役というわけではない



が、未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選にも選ばれている。石がまは、越冬中のコイやフナの習性を利用した一種の追い込み漁法で、水深約2mの湖底から水面上数10cmまで大小の石を積み上げた「敷石台」上に立ち、石の中に入り込んだ魚をつつき棒で追い詰めて、内部に設置された「洞檻」(捕獲用の箱)に入れるものである。

## 防災 1

嵐ヶ鼻土手(鳥取市、13世紀以降、選奨土木遺産)

Aは、中世に遡る古い堤防の跡で、千代川左岸の安定化に貢献したとされる。旧堤防上は長さ700mにわたり心地よい林間の遊歩道になっている。



## 防衛 1

鳥取には海岸に沿って6基の土塁台場が並び、うち5ヶ所が国史跡に指定されている。中でも、規模・保存状態ともに最良なのが由良台場(北栄町、文久4(1864)、国史跡) Aで、東西125m、南北84mという規模は全国的にも最大級である。台場は、構築材料で土塁台場と石塁台場に分かれるが、鳥取藩の台場はすべて土塁である。

